



日本神経学会●監修

「パーキンソン病治療ガイドライン」作成委員会●編

パーキンソン病治療ガイドライン 2011

書評者

澁谷 統寿（新古賀病院・脳神経内科）

医療には事実と論理に基づく科学性と、経験や伝承に基づく非科学性が混在しており結果を予想できないことが多く、医師の経験則がいくら豊富であっても必ずしも患者にとって良い結果をもたらすとは限らない。経験的に最も尊重されていることは、患者さんと真面目に向き合って対話し、いかに信頼関係を築くかである。臨床医は専門性（自律性）の立場から、一人一人の患者の選択すべき道を示し、臨床現場ではどのような場面に遭遇しても適切に判断し対処できる能力を養っておくことが必須である。その過程で根拠に基づく治療ガイドラインの利用は医療の質の標準化（均一化）に有用であり、その普及は社会における医療の在り方を問い直すものである。

『パーキンソン病治療ガイドライン 2011』は「抗パーキンソン病薬と手術療法の有効性と安全性」と「クリニカル・クエスチョン」の2編構成となっている。前者は2001年以降のエビデンスを踏まえ、薬剤や手術療法の有効性、安全性、臨床使用での注意事項や今後の検討課題についてガイドライン作成委員会の現在の考えが簡潔明瞭に

記載されている。

「クリニカル・クエスチョン」は9年前に作られた治療ガイドライン2002と比べるとその作成プロセスが格段に進歩していて読みやすい構成で素晴らしい出来上がりである。これは改訂作業にあたりライブラリアンの協力と医療情報学の専門家の意見を参考に、ガイドライン作成上の課題が体系的に整理されたことによる。パーキンソン病は慢性進行性の疾患であり予後への影響因子も多様で、患者のQOLと10年後、15年後の長期予後を見据えた治療が求められる。また、治療薬による副作用やさまざまな合併症、運動症状、自律神経障害や精神症状への対応も必要である。これらの想定される臨床上の疑問に対してエビデンスとともに作成委員の臨床経験を適切に取り込み、Minds推奨グレード（おすすめ度）として明確に回答し、その背景と解説、臨床に用いる際の注意点が適切に示されている。第三者からの評価（EUを中心としたAppraisal of Guidelines for Research & Evaluation; AGREEの評価法）やさまざまな視点からのオープンな議論によっても高く評価さ

れる書である。

この治療ガイドラインは神経内科医を対象として作られたものであるが、内科医や研修医にとっても理解しやすい内容で、臨床現場での使い勝手の良いし悪しの視点からからも、ユーザーとしての各医師にとって使いやすく、患者アウトカムの改善に寄与するであろう。

治療ガイドラインは“Starting Point for Discussion”として本来は医師の意思決定を「支援する（assist）」役割を担っている。しかし、治療ガイドラインが社会的に広く認識された今日では医療訴訟の判断基準として利用される可能性も高くなっている。本書の活用は臨床医のdefective medicineへの懸念を払拭して医療の質の向上に役立つものであり、多くの臨床医が本ガイドラインを適切に利用することを期待している。

B5 頁220 2011年 医学書院刊
定価 5,460円（本体5,200円＋税5%）
[ISBN978-4-260-01229-4]

